

私の学生時代

渡部 礼二



今年は6度目の亥年を迎える。小児科医になってからも4回り近くなる。私は決して崇高な志をもって医学部を選んだ訳ではない。ただ親戚のほとんどが医者で、なんとなく医学部に入ってしまったの

である。

教養部時代に講義はサボりがちだった倫理学の試験勉強中でその内容にはまっていまい、試験勉強不備のまま試験を受け不可を頂いた(後日改めて受講し単位を取得)が、私にとって意義ある科目であった。「人間とは何だ!」「生きている価値は何だ!」という命題を私に突き付けてくれた。学部に進級後、生理学で猫小屋に入って元気な猫を捕まえて実習に供した。ウサギでの実習もあった。また精神科で人間の異常な精神状態を観た。これらの事が健常な動物の生命と理性を失った人間の生命と価値はどちらが重いのか疑問に思った。「人間とは何だ!」という命題は理性のない人間も勉強すれば解決できるのではないかと思った。口下手な私には精神科は向かない。他に理性のない人間では赤ん坊だ。それらの事が私に小児科へ向かわせた。

一方この時代は学園闘争の真っただ中であつたが学生運動をするでもなく、学校の勉学に励んだ訳でもない。動物が好きだったのでジョイ・アダムソンの「私のエルザ」をはじめとする彼女の著作、ムツゴロウこと畑正憲等の動物の本を読み漁り、次第に伊谷純一郎、今西錦司、河合雅雄ら京大霊長類研究所の所謂サル学、そしてデズモンド・モリス、コンラート・ローレンツらの動物行動学の著書へと移って行った。挙句は京大人類学会の機関誌「季刊人類学」を定期購読までもしていた。これらの事も小児科を選ばせる要因になった。

父は卒業して入局すると嫌でも専門科目を勉強す

るから、学生時代はその科目以外のものを勉強しておけと言っていたが、私は学校の勉強は適当にしかせず、動物の本だけは読んでいた。それでも低空飛行だったが結局は卒業させて貰い、医師国家試験もなんとなく通ってしまった。

金大小児科入局後は、学生時代の不勉強を取り返すべく平均値までは達したつもりだが、亥年の性が自分の興味ある所へは今でも突っ走る傾向がある。

遠く過ぎ去った50年前の不真面目な学生時代は決して無駄な時間ではなかった。良い肥しになったし、気持ちは今もその延長線上で過ごしている。長いストライキで培われた「長いものには巻かれるな!」という精神は今も残っている。動物行動学や人類学がリチャード・ドーキンズ、井村裕夫らの進化論や進化医学にとって代わり現在の医療・医学を見つめさせ、また倫理学は一般哲学にとって代わり医療行為を含め日常の行為行動の糧となっている。

父の「専門以外の事を勉強しておけ」という言は「学生時代は学問よりも他の世界の勉強しろ」と言う意味だったのだろうと勝手に解釈している。しかしそんな不真面目な学生時代を「有意義な学生時代だった」と意味付ける事は言い訳に過ぎないのかもしれない。

(金沢市西1区・わたなべ小児科医院)